

國學院大學學術情報リポジトリ

スロヴェニア・モデルネの誕生：
イヴァン・ツァンカルのウィーン

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宍戸, 節太郎, Shishido, Setsutaro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000570

スロヴェニア・モデルネの誕生

——イヴァン・ツァンカルのウィーン

宍戸節太郎



ヴルフニカ、ツァンカルの生家近くにて
(2019年9月、撮影筆者)

イヴァン・ツァンカル (Ivan Cankar, 1876-1918) は、最初に名前を挙げられるべき、スロヴェニアを代表する作家である。首都のリュブリャナや故郷のヴルフニカでは、街のあちこちに彼の銅像やレリーフが施され、土産物屋の陳列棚には、掌編「一杯のコーヒー」(Skodelica kave', 1910)⁽¹⁾ゆかりのイラスト入りコーヒーカップが、きれいに並べられている。ツァンカルの名前を冠した、通りや施設も数多い。現代スロヴェニア文学の成立期、ツァンカルは旺盛な創作意欲で、いまに読み継がれる多くの傑作を残し、スロヴェニア語による言語表現の地平を拡大した。

ツァンカルもその一人である「スロヴェニア・モデルネ」は、19世紀末から20世紀初頭にかけての文学について言われ、この時代の言語芸術、「とりわけイヴァ

ン・ツァンカル、オトン・ジュパンチッチ (Oton Župančič, 1878-1949)、ドラゴティン・ケッテ (Dragotin Kette, 1876-1899)、ヨシプ・ムルン (Josip Murn, 1879-1901) といった、1899年から1918年までの間の時代の物語作家、抒情詩人たちの文学的創作」⁽²⁾を指す。ツァンカル全集版編者の一人、フランツェ・ベルニク (France Bernik, 1927-) は、いまに連なるスロヴェニア・モデルネの重要性を、次のように説明する。

スロヴェニア・モデルネは、たとえそれによりすっきり方向規定されているわけではないとしても、まさにその多彩な表現様式をもって、1918年という年をさらにはるかに越えて、スロヴェニア文学の発展にインスピレーションを与えてきた。戦間期の多くの卓越したスロヴェニアの物語作家、叙情詩人たちがその影響のもとで執筆をし、それに抗い、拒否する場でさえ、彼らがツァンカルやジュパンチッチに依拠していることがはっきりとわかる。第2次世界大戦を経てなお、スロヴェニア文学にはモデルネの諸要素が見出される。モデルネのテーマ、精神、形式・様式的反響の影響力が、もはやそれほど強いとは思われないにもかかわらずである⁽³⁾。

さしずめ、日本で言えば、夏目漱石 (1867-1916) や森鷗外 (1862-1922) らに代表される近代日本文学、時代的には、ちょうど明治から大正にかけての時期に当たるといえる。いずれにせよ、スロヴェニア文学におけるモデルネの作家たちの、現在にいたる役割の大きさがうかがわれる。

イヴァン・ツァンカルはこの時代、彼にとっては異郷の地ウィーンにあって、スロヴェニア語で創作をつづけ、スロヴェニア・モデルネを牽引した。最初にまずツァンカルのウィーンでの足どりをたどり、次にドイツ語空間のツァンカル、さらにスロヴェニア語空間のツァンカルと、以下、順に見て行きたいと思う。

1. ウィーンのツァンカル

ツァンカルは1896年秋、リュブリャーナで大学入学資格試験に当たる、マトウラ (Matura) に合格し、帝都ウィーンで工科大学に学籍登録をしている。ほぼ女手一つで育ててくれた母ネジャ (Neža Cankar, 1843-1897) の最期を看取るべく、翌1897年3月いったん郷里に戻るものの⁽⁴⁾、次の1898年には再びウィーンに向かい、1909年9月までをこの地で過ごしている。

上京当初のウィーンでのツァンカルは、ときにはただ空腹を紛らすように、通りという通りを徒歩で歩き回り⁽⁵⁾、分離派やウィーンの文士たちとも親密な交流を持った友人ジュパンチッチとともに⁽⁶⁾、ウィーンの『ツァイト』 („Die Zeit“, 1894-1904) 紙や、ミュンヘンの『ユージェント』 („Die Jugend“, 1896-1940)

誌目当てに、毎週なけなしのお金をかき集めてカフェにも通っている⁽⁷⁾。ツァンカルにとって、最初の数年間カフェは仕事場でもあり、当時の手紙などには、「少なからず職業作家としての自負を持って、「カフェ・ウィーン (Café Wien)」、 「カフェ・ベートーヴェン (Café Beethoven)」、また「カフェ・ムゼウム (Café Museum)」についての言及⁽⁸⁾が見られる。

ウィーンのカフェはよく知られるように、多くの知識人たちがそこに集い、情報を収集、交換する、知の集積地の役割も合わせ持つ。カフェ・ベートーヴェンでは、「フーゴ・ベッタウアー (Hugo Bettauer, 1872-1925) とシュテファン・ツヴァイク (Stefan Zweig, 1881-1942) が定期的に顔を合わせた」⁽⁹⁾と言われ、カフェ・ムゼウムの常連客には、オットー・ヴァークナー (Otto Wagner, 1841-1918)、アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933)、グスタフ・クリムト (Gustav Klimt, 1862-1918)、エゴン・シーレ (Egon Schiele, 1890-1918)、ゲオルク・トラークル (Georg Trakl, 1887-1914)、ヨーゼフ・ロート (Joseph Roth, 1894-1939)、ヘルマン・ブロッホ (Hermann Broch, 1886-1951)、ローベルト・ムージル (Robert Musil, 1880-1942)、ペーター・アルテンベルク (Peter Altenberg, 1859-1919) といった、世紀転換期のウィーンを代表する建築家、画家、詩人、作家たちが名前を連ねている⁽¹⁰⁾。

職業作家とはいえ、すぐに生活が成り立つはずもなく、創作のかたわらツァンカルはジャーナリストとしての仕事もこなしている。1899年に、ツァンカルは一時ウィーン、マリア・エンツェルスドルフ (Maria Enzersdorf) に暮らすスロヴェニア人、ヤコブ・プクル (Jakob Pukl, 1849-1913) のもとに身を寄せ、プクルの計らいで翌1900年から6年間、ドイツ語雑誌『インフォルマツィオン』 („Die Information“) や、同じくドイツ語の週刊新聞『ズューデン』 („Der Süden“) に記事を書いている。どちらも、南スラヴ経済圏に関心を持つ企業家たちのためのニュース仲介業、雑誌連合「オーストリア通信」 (Oesterreichische Korrespondenz) 編集によるもので、ツァンカルの業務内容は、毎日南スラヴ圏に関する政治記事にくまなく目を通し、これらを文章にまとめる仕事だった⁽¹¹⁾。「彼にとっては実入りのいい、それほど時間を要しない食べるための仕事」⁽¹²⁾であり、二つの雑誌には、ドイツ語でツァンカルのエッセイも掲載されたものの、残念ながら「匿名」⁽¹³⁾のままだった。

1899年の11月中旬、ツァンカルはウィーン郊外の労働者街、16区のオッタクリング (Ottakring) に移り、リンダウアー通り (Lindaugasse) 26番地に部屋を借りて住み始める。部屋の貸主は、離婚して上に二人の女の子シュテファカ (Štefka, 1887-1962) とアマーリア (Amalia, -1902)、下にも二人の男の子ヴィリー (Willy) とアルフレート (Alfred) と、4人の子供のいるチェコ系の縫物師、アルビナ・レフラー (Albina Löffler, 1865-1944) という女性で、ここでツァンカルは以後ほぼ10年間、ウィーン時代の最後までを過ごした。



右手前がツァンカルの暮らした建物
(2018年9月、撮影筆者)



建物正面に設置された記念プレート
(2018年9月、撮影筆者)

2. ドイツ語空間のツァンカル

ツァンカルの作品はすでに1900年にはドイツ語訳が見られ、生前からほぼ時間差なくドイツ語に訳され紹介されていた⁽¹⁴⁾。1918年にツァンカルはリュブリャーナで亡くなり、ドイツ語圏では1929年の時点ですでに、「発見」⁽¹⁵⁾される性格の作家、つまり「すでに同時代の作家とは見なされなくなっていた」⁽¹⁶⁾。その後も長い間「選択的、散発的な」⁽¹⁷⁾翻訳・紹介がつづき、1990年代に入ってようやく大きな転機を迎える。

1994年、エルヴィン・ケストラー (Erwin Köstler, 1964-) が、オーストリアのクラゲンフルト (Klagenfurt, スロヴェニア語名ツェロベツ (Celovec)) にあるドラヴァ (Drava) 出版社から、ツァンカル、ウィーン時代の作品集『目的の地前』 („Vor dem Ziel“, 1994) を、ドイツ語に訳して出版した。これが「予想を超える大きな反響」⁽¹⁸⁾を呼び、ケストラー自身インタビューに答えているところによれば、新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどで、その書評の数は40を超えたという⁽¹⁹⁾。それから20年以上を経て、かつての「スロヴェニア文学、そもそも (旧) ユーゴスラヴィア文学に対する関心は後退してきた」⁽²⁰⁾とはいえ、2011年までに、翻訳・出版されたツァンカル作品は計15巻におよび、今ではツァンカルの主だった作品は、ほぼドイツ語で読むことが可能となっている⁽²¹⁾。

1994年刊行『目的の地前』のカヴァー袖には、ドイツ語圏における幅広いツァンカル受容にとっての、障害のいくつかが言及されている。

イヴァン・ツァンカルが、実際これまでドイツ語圏の読者に知られることがなかったのは、彼の作家としての水準というよりも、むしろ彼の出自に起因する。彼は少数民族が話す言語で書き、最近にいたるまで人々はその言語についてほとんど知ることもなく、さらにはツァンカル以前に、その言語であ

れこれ書かれることなどなかった。結果ツァンカルは、いともたやすく偉大なヨーロッパ文学のわきへと押しやられてきた。つまるところしかし、ツァンカルが書いた言語には、ドイツ語への翻訳者がほとんどいなかったし、それはいまでも変わらない。彼がたとえ第一級の水準の芸術家であったとしても、我々にとってツァンカルは未知の存在のままだった⁽²²⁾。

加えて、「これまで、とりわけふさわしい翻訳がなかったことが、より広いツァンカル受容を妨げてきたと考えられる。ツァンカルのものでドイツ語で出版されたものはたいてい古く、図書館でしか見つけられないか、あるいはそもそも翻訳があまりにつたない」⁽²³⁾。ツァンカル受容の障害はおもに、スロヴェニア語使用人口の規模の小ささと、優れた翻訳の欠如の二点に集約されている。

スロヴェニア語使用人口の問題についてはあとに見るとして、もちろん優れた翻訳がまったくなかったわけではない。ケストラーは彼以前の優れた業績の一つに、たとえば1965年、マンフレート・イエーニヒェン (Manfred Jähnichen, 1933-2019) による翻訳⁽²⁴⁾を挙げている。東ベルリンで出版されたこの作品集は、50年代の終わりに東独が実施した、対ユーゴスラヴィア文化開放政策の成果の一つであり、編訳者のイエーニヒェンには、ほかにもユーゴスラヴィアの散文を集めた二つのアンソロジーの業績がある⁽²⁵⁾。イエーニヒェンの訳には精緻なあとがきも付されており、ケストラーはこれをドイツ語でのツァンカル研究における、「初めての具体的な、精神的、政治的背景の叙述」⁽²⁶⁾として、肯定的に評価している。

広くドイツ語圏における、イヴァン・ツァンカル像を探るべく、イエーニヒェン以前のツァンカルの紹介を、いくつか見てみることにしよう。初めにまず、1930年に出版された、『慈悲の聖母病棟』 („Hiša Marije Pomočnice“, 1904) のドイツ語訳序文、冒頭の部分である。

イヴァン・ツァンカルはウィーンでたびたび、小児専門病院を訪れた。そこで小さな白いベッドに横たわり、死に行くことを救いのように朗らかに、満ち足りた様子で待ち受ける少女たち。病んだ、小さな、不具になった少女たちの、浄化され、聖化された世界は、彼の心優しい、悲しげな、スラヴの本性を、心底揺さぶったに違いない⁽²⁷⁾。

ツァンカルは、部屋を借りていたレフラー家の二女、アマーリアを見舞うべく、たしかに1901年秋から、彼女の亡くなる1902年7月まで、この小児専門病院を定期的に訪れており、小説『慈悲の聖母病棟』のマルチ (Malči) は、アマーリアがモデルとされる。死期の近いアマーリアを思って足しげく通い、そっと寄り添い、ツァンカルが心動かされただろうことは想像に難くない。しかしながら、こ

こで「心底揺さぶられたに違いない」とされる、ツァンカルの、「心優しい、悲しげな、スラヴ的本性」(weiche, traurige, slawische Art) とは、はたして何であろうか。

第 2 次世界大戦後間もない、1947年には、ツァンカルは次のように紹介されている。

他の詩人であればいつもすぐに私たちの目にとまっていたはずのところ、私たち広い世界の住人に長く未知のままだった、人並外れ、苦悩する才を持ったこの風変わりな詩人は、スロヴェニア以外の他のどんな国にも誕生することは、なかったかもしれない。彼には、彼をただこの空のもとへと導く、いくつもの不思議な特性そのものが見出される。しかし彼にあるそのすべて、敬虔な素朴さと薄暗い生の不安、大きな世界への荒々しい渴望と静かな泉への郷愁、不安、そして憂いに満ちた安らぎ、それらはまた、彼が属する民族が映し出す、光の反射でもある。それはいにしえの時代のほの暗い、美しい神話に、清らかな心情を保持し、とはいえすでに醒めた精神の、より明るい領野への旅を始めた、民族の光の反射である⁽²⁸⁾。

詩的で、幻想的な言葉が並ぶ。しかし、「人並外れ、苦悩する才」(ein ungewöhnlicher, leidensfähiger Mensch) とは、どんな才能だろうか。「敬虔な素朴さ」(seine fromme Einfalt)、あるいは「清らかな心情」(reines Gemüt) とは、いったい何だろうか。「心優しい、悲しげな、スラヴの本性」同様、ここでもただ表面だけが美しい、空疎な言葉が並んでいる。ツァンカルが持つとされる、「不思議な特性そのもの」(merkwürdige Züge an sich) は、「彼が属する民族」(Volk, dem er angehört) にあっさり還元されてしまい、それらが明確、かつ合理的に説明されることはない。

ドイツ語訳の良し悪しについては、判断は控える。しかしながら、総じてケストラー以前のドイツ語圏では、ツァンカル文学の特性を明らかにすべく、テキストに基づいて分析、解釈を行ない、議論を戦わせる作業が積み上げられていない。言語芸術としてのツァンカル作品の魅力の所在は、それゆえそもそもその有無も含めて、活発に議論されることはなかったと思われる。

ドイツ語圏で、ほとんど取り上げられることのなかったものの一つに、たとえばツァンカル、ウィーン時代のドイツ語による詩が挙げられる。ツァンカルのドイツ語詩は、1967年から1976年にリュブリャーナで編纂された、批判版ツァンカル全集、第 2 巻に収められている。少なくとも、ここには上に見たような、「心優しい、悲しげな、スラヴの本性」、あるいは「敬虔な素朴さ」とは容易に結びつかない、自由で、闊達な詩人ツァンカルがいる。

ツァンカルの従弟にあたる、イジドール・ツァンカル (Izidor Cankar, 1886-

1958) によれば⁽²⁹⁾、1902年から1903年にかけて書かれたと見られる詩を、いくつか下に引いてみることにしよう。

RUHEBEDÜRFNIS

安らぎの欲求

Ein Gaskandelaber steht einsam
vor der Oper am Opernring.
Ihn schläfert; die Tramwayglocken,
die machen: kling-kling-kling.

ガス灯がぼつんと一人で
オーベルリングのオペラハウスの前に。
路面電車の鐘が、眠いところへ、
やってくる、チリン、チリン、チリン。

Da sagt der Gaskandelaber:
Das ist doch wirklich nicht schön,
daß ihr da fortwährend klingelt,
ich möchte schon schlafen gehn! ⁻⁽³⁰⁾

さてガス灯が言う。
それにしたってひどいじゃないか、
きみたちひっきりなしにチリンチリン、
ぼくだってもう寝たいんだから！—

各4行の2連で構成され、第1連の1行目と3行目、2行目と4行目、第2連は2行目と4行目で、それぞれ脚韻を踏んでいる。次に挙げるものも、詩形は同じである。

UNNÜTZER VORWURF

役立たずな非難

Ein Musiker stand vor der Oper
und höhnte mit Gewicht:

Viel kannst du, Gaskandelaber,
doch drehen kannst du dich nicht.

音楽家が一人オペラハウスの前に立ち
重々しげにあざけた。
いろいろできるんだね、ガス灯だけに、
ただどきみまわることはできないんだ。

Da sagte der Gaskandelaber:
Ich bleibe ruhig stehen,
bin gleich von vorn und von hinten,
wozu soll ich mich drehn?⁽³¹⁾

さてガス灯が言った。
ぼくはじっと立ったままさ、
前からでも後ろからでもおんなじ、
何だってまわんなきゃならないのさ？

カフェ同様、ウィーン文化を象徴するものの一つに、リング大通りに面し、人々を引きつけるオペラハウスがある。しかしツァンカルの目に留まるのは、当のオペラハウスではなく、誰にも気に留められず、そこにぼつんと立っているはずのガス灯である。

1897年、カール・ルエーガー (Karl Lueger, 1844-1910) が、念願のウィーン市長に就任する。ルエーガーは政治的手段としての反ユダヤ主義を巧みに操り、キリスト教社会党をオーストリア最大の政治勢力に拡大し、のちのヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) の政治的戦術・戦略に、決定的とも言える影響を与えた一人に数えられる⁽³²⁾。市長就任後、ルエーガーが最初に手がけたのが、ガス事業の全面的な刷新であり、ウィーンでは当時、最新のガス供給網が急ピッチで整えられた。1899年10月31日、リング大通りの照明は、以前とは見違えるほどに明るくなったと言われる⁽³³⁾。ツァンカルが見ていたのは、このガス灯である。

ガス灯にも日頃、思うところがいろいろあるのだろう。安らかな睡眠はいつも路面電車で邪魔される。オペラハウスを背に、ときどき音楽家が話しかけてくるのだが、自分がウィーン文化の中心側にいるつもりなのか、得意げに言いがかりをつけてくる。ガス灯にももちろんガス灯で、言いたいことは山ほどある。詩人としてのツァンカルは、ここでガス灯に変身し、ガス灯の言い分を代弁している。

のちにウィーンに生まれた、やはりウィーンゆかりの社会学者ピーター・L・バーガー (Peter Ludwig Berger, 1929-2017) は、著書『癒しとしての笑い』

(„Redeeming laughter“, 1997) の中で述べている。滑稽な経験は、「二つ以上の次元でものを考える能力があるかどうか」⁽³⁴⁾に基づく。「滑稽なものはふつうの日常的な実存を超越する。すなわちそれは、たとえ一時のことにせよ、一つの異なった現実を出現させ、そこではふだんの生活をささえている思いこみや規則が宙ぶりにされる」⁽³⁵⁾。「いかにつかの間とはいえ、滑稽なものは(…)至高の現実を相対化する。突然、よく見慣れたものに新しい照明があてられ、奇妙な見慣れぬものへと変化する」⁽³⁶⁾。

ツァンカルの詩には、日常の現実と詩的現実を自在に行き来することのできる、ユーモアあふれる、知的なツァンカルの顔が浮かぶ。モーリッツ・チャーキ(Moritz Csáky, 1936-) は、ツァンカルが、「彼がその都度異なる文化的コミュニケーションの空間で、ほとんど同時に活動する術を知っていた、格好の実例である」⁽³⁷⁾と言う。「あるときは貧しい、街外れの労働者たちの空間で。あるときは芸術家や作家、ジャーナリストたちの知的コミュニケーションの空間で。さらには二つの相異なる、言語コミュニケーションの空間で」⁽³⁸⁾。

もう一つの、ツァンカル本来の言語空間、スロヴェニア語を軸に、次にツァンカルのもう一方の足どりをたどってみよう。

3. スロヴェニア語空間のツァンカル

独立国家としてのスロヴェニアの歴史は、始まったばかりである。ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国を構成する、連邦内の最先進共和国だったスロヴェニアは、1991年6月25日、旧ユーゴからの独立を宣言した。翌92年1月、当時のEC諸国が独立を承認し、歴史上初めて、スロヴェニア人が自らの独立国家を形成した。

とはいえ彼らの言語、スロヴェニア語には長い歴史がある。現存する最古の写本『ブリジンスキ・スポメニーキ(フライジング文書)』(„Brižinski spomeniki“) は、実際には9世紀に書かれた文献と推定されている。1803年、ミュンヘン近郊のフライジング(Freising)司教座の図書室で発見され、文字はラテン文字で書かれている。中世の写本でも、スロヴェニア語で文書は書きつづけられ、1582年には、プロテスタントに改宗したスロヴェニア人司祭、プリモシュ・トルバル(Primož Trubar, 1508-1586)の手で、新約聖書の全訳が出版された。2年後の1584年、トルバルの弟子、ユリ・ダルマティン(Jurij Dalmatin, 1547-1589)は、旧約を含めた聖書の完訳を完成、出版している。マルティン・ルター(Martin Luther, 1483-1546)の翻訳により、聖書のすべてがドイツ語で読めるようになったのが1534年、遅れることわずか50年である⁽³⁹⁾。

スロヴェニア人居住地のほとんどは、1282年にハプスブルク家の所領となっており、以後、1918年まで600年以上にわたって、その支配下に置かれた。それゆえスロヴェ

ニア語に限らず、そもそも教育機会や識字率の問題は、ハプスブルク帝国における教育政策によって左右された。アレシユ・ガブリチ (Aleš Gabrič, 1963-) によれば、教育のための言語としてドイツ語の使用が顕著になるのは、おおむね18世紀末頃からであるという⁽⁴⁰⁾。スロヴェニア語による教育の本格的開始も、これとほぼ同じ時期にあたる。

マリア＝テレジア (Maria Theresia, 1717-1780) の晩年、「教育計画に基づいて、国民全体が読み書きや、農業・手工業・軍隊に役に立つような算術を身につけ」⁽⁴¹⁾られるよう、一連の学校改革が行われた。1774年、スロヴェニア人が住むほぼすべてを含むハプスブルク家世襲領では、「全ての少年少女に基礎教育を受けることを義務づけた初めての法律」⁽⁴²⁾が定められる。民衆が、「ハプスブルク家に忠誠を抱き、己の分をわきまえ、臣民たる自覚をもってその職分を果たすことで国力の増進に貢献すること」⁽⁴³⁾が目指されたものだったとはいえ、岩崎周一が『ハプスブルク帝国』(2017年)に述べるように、「ここで君主国内の多文化性に意が注がれ、さまざまな言語による教育が認められたこと」⁽⁴⁴⁾の意義は大きい。これ以後スロヴェニア人諸地域では、基礎教育にあたる小学校で、スロヴェニア語による授業が行われるようになる。

スロヴェニア語による教育の開始はただし、必ずしもすぐにスロヴェニア語の、標準語使用人口の拡大にはつながらない。ガブリチによれば、「国家が学校教育のための資金を提供していなかったので、義務教育といいながら、それを受ける子供の割合は非常に緩やかにしか増えていかず、19世紀の半ばまで、義務教育を受けた子供の割合は約3分の1にすぎなかった。子供の過半数が義務教育を受けるようになったのは、1869年の学校教育改革以降である」⁽⁴⁵⁾。リュブリャーナ(ドイツ語名ライバッハ (Laibach)) を州都とした、現在のスロヴェニアの中核地クライン (Krain) 州を見ても、1851年の小学校の就学率は、わずか21.3%に過ぎない⁽⁴⁶⁾。1891年になると、これが一校当たりの児童数207.6人、教員一人当たりの児童数70.3人と、必ずしも依然恵まれた環境とは言えないものの、その就学率は82.9%と、飛躍的に向上している⁽⁴⁷⁾。現在は200万の人口を超えるスロヴェニアだが、オーストリア＝ハンガリー帝国期の1890年代、帝国内のスロヴェニア人人口は120万人代で推移している⁽⁴⁸⁾。ツァンカルがリュブリャーナの実科学校に通い、その後ウィーンに向かった時代である。

ツァンカルは長い間ドイツ語空間で暮らし、仕事もこなし、さらにはドイツ語で創作も行った。それでもツァンカルにとって、創作の言語は何よりもまずスロヴェニア語だった。それは単に、彼にとってスロヴェニア語が母語だったからというばかりではない。マリア・ヴェラ・クラリチーニ (Maria Vera Claricini, 1946-) は、「ツァンカルにとって、彼がスロヴェニア語で書くだろうことは、最初から決まっていた」⁽⁴⁹⁾と言う。

リュブリャーナで通った実科学学校の授業言語のドイツ語を、彼はよそよそしいとさえ感じていた。それは彼の授業科目を台無しにし、ドイツの文学や文化に通じる道をいびつなものにしてしまった。—ウィーン時代によくそこから解放されることになる、嫌悪感に他ならない—しかしスロヴェニア語もまた、のちにモデルネと呼ばれる新たな文学がそれを要求することになるのだが、ツァンカルがそれを初めて生み出さなければならなかった⁽⁵⁰⁾。

ツァンカルは、自らはウィーンにしながら、「ほとんど使命感と言っていいほどの無条件さ」⁽⁵¹⁾で、リュブリャーナの文化現象に関与している。戯曲、長編小説、物語、論争、エッセイその他、「彼は自覚的に新たなスロヴェニア文学を創造した」⁽⁵²⁾。

郷里のヴルフニカで、スロヴェニア語による基礎教育を終えたツァンカルは、1888年、リュブリャーナの実科学学校 (die Realschule/realka) に進学する。実科学学校はギムナジウム同様、大学での高等教育を目指す若者が通う中等教育機関で、ギムナジウムがエリート主義的、人文主義的傾向であるのに対して、実科学学校は自然科学や、広く教養教育に主眼が置かれていた。卒業生にはツァンカルのほかにも、例えば詩人のスレチコ・コソヴェル (Srečko Kosovel, 1904-1926) など、多くの著名人がいる⁽⁵³⁾。

後年、ツァンカルはエッセイ「実科学学校」(‘Realka’, 1914) の中で、ここでの言語体験について、詳しく書いている。

私は実科学学校に通った。彼らは授業を大きな体育館で始めた。しかも私たちに校則を説明するようなやり方で。ドイツ語で。私たちは長い列を成して立っていた。美しいクライン州のありとあらゆる地方からやって来た頼りなげな子供たち。私たちはそこに立ち、校長の真剣な顔つきに見入り、何もわからなかった。体育館があまりに広く、天井が高くて、息苦しく感じられた。儀式的の時間の顔という顔が、私には敵対的に見え、わけもわからず、重い、見知らぬ空気が胸を締めつけた。言葉や顔、空気から私が読み取れたのは、世の中にはたくさんの禁止があって、罰が無数で、かつ重いということだった⁽⁵⁴⁾。

実科学学校の授業言語は、ツァンカルが書いている通り、当時ドイツ語だった。小学校を母語で過ごした12歳のツァンカルには、はじめ何もわからなかった。

郷里の学校で、私は自然、歴史、地理に、大きな喜びを感じた。この喜びはいつか消え失せた。見知らぬ人間が、愛すべき事物について私に語りかけた。彼は私に、うろ覚えの、はっきりしない言語で語りかけ、彼と私の間

に高い垣根を築いた。自然は私と、かろうじてドイツ語で話していたものの、死んでしまった。歴史はどこか霧の中へと流れていき、消えてしまった⁽⁵⁵⁾。

それでも、

耳は聞き取り、悟性が働いてそれを書いたのだけれども、心は感じず、頬があたたかくなることはなかった。これらすべての知識は、生きることとは何の関係もなく、私や、私が手でつかむことのできるもの、魂で受けとめることのできるものとは、何一つ関係がなかった⁽⁵⁶⁾。

ツァンカルは「自分に、自分の知の世界を創り出し」⁽⁵⁷⁾、スロヴェニア語で「詩を書き」⁽⁵⁸⁾はじめる。ツァンカルにとってスロヴェニア語は、単なる道具などでは決してなく、自分が自分であり続けるための、自分が世界とつながりを保持するための、代替不能な唯一の方法だった。ツァンカルは別のところで、その頃実科学校でスロヴェニア語を教えていたフラン・レヴェツ (Fran Levec, 1846-1916) について、こう書いている。「当時を思い出して楽しい気持ちになるのは、唯一ギムナジウムの先生たち、なかでもとくにスロヴェニア語教師だったFr. レヴェツだ。彼は生徒たちを文法で苦しめるのではなく、言語に対する愛情と敬意を教えてくれた」⁽⁵⁹⁾。

1893年から1896年まで、ツァンカルはギムナジウムの生徒たちで構成される文学サークル、「ザードゥルガ」(Zadruga) に参加している。ケッテ、ムルン、ジュパンチッチたちと、ツァンカルはここで知り合った。朗読や発表、つづいて討論という形で、会合の機会が定期的に持たれ、出席者たちは仲間の発表について、批判的にコメントするのがルールだったという⁽⁶⁰⁾。ツァンカルは1893年にはすでに、イヴァン・カツィヤナル (Ivan Kacijanar) の筆名で、後述する当時最重要の文芸誌、『リュブリヤンスキ・ズヴォーン』(„Ljubljanski Zvon“, 1881-1941) に、自身最初の詩を発表している⁽⁶¹⁾。

1896年、ツァンカルはウィーンに上京する。ウィーンでのツァンカルの活動の一つに、文学サークル、スロヴェニア文学クラブへの参加も挙げられる。メンバーはツァンカル、ジュパンチッチ、ウィーンには不在のケッテのほか、フラン・ゴヴェカル (Fran Govekar, 1871-1949)、フラン・ヴィディツ (Fran Vidic, 1872-1944)、フラン・ゴエステル (Fran Goestl, 1864-1945)、フェルド・ヤンチャル (Ferdo Jančar, 1872-1898)、イヴァン・シュクリヤネツ (Ivan Škrjanec, 1874-1903)、アントン・マヤロン (Anton Majaron, 1876-1898)、フラン・エレル (Fran Eller, 1873-1956) などが知られている⁽⁶²⁾。

1898年11月、母ネジャの最期を看取ったツァンカルは再びウィーンに戻るものの、学業には復帰せず、創作のかたわら、リュブリャーナ発行の日報紙、リベラ

ル系の『スロヴェンスキ・ナーロト』 („Slovenski narod“, 1868-1945) や、カトリック系の『スロヴェーネツ』 („Slovenec“, 1873-1945) の文芸欄にも、記事を寄せている⁽⁶³⁾。

ウィーンでの文学体験を振り返って、ツァンカルは書いている。

マトゥーラの後 (1896年)、私は大学で技術工学を学ぶべく、ウィーンへ赴いた。当時スロヴェニア文学には、多くの外国からの影響や、新たなスローガンが飛び交っていた (ゴヴェカルが説いて回ったドイツ自然主義、不当にもジュパンチッチと私とその信奉者だと説明されたフランスのデカダンス)。これらの新たなスローガンは、大部分空虚な言葉に過ぎなかった。当時のスロヴェニア文学の生きた、新鮮な動きは、ストリタール (Josip Stritar, 1836-1923) 派の死した形式主義への反発という、健全な反応ばかりだった。新しい文学世代は自分たち自身を、民謡や、プレシエレン (France Prešeren, 1800-1849)、Fr. レウスティク (Fran Levstik, 1831-1887) の子孫であると自認していた⁽⁶⁴⁾。

ここでツァンカルは、民謡や、プレシエレン、レウスティクを称揚する一方で、「新しい文学世代」(novi literarni rod) という言葉を使って、自身を含む新たな文学世代を明確に区別している。しかしながら、ウィーンに暮らし、スロヴェニア語で創作をつづける彼が、スロヴェニアの人々に理解されるには、多くの困難がともなった。ケストラーによれば、スロヴェニアの人々にとって当時、「ウィーンとは、健全な庶民感覚に従えば、道徳的にだらしない、汚らしい文学の所在地だった」⁽⁶⁵⁾。ツァンカルも自分で書いているように、彼自身ときに、ただウィーンに住んでいるというだけの理由で、「デカダンス」(dekadenca) だとして非難され、「スロヴェニアに関する事柄に意見を言う権利を疑問視された」⁽⁶⁶⁾。

4. スロヴェニア・モデルネと『リュブリャンスキ・ズヴォーン』

多くの文学運動と異なり、スロヴェニア・モデルネには、初めにまず主義主張を詳述し、次に実際それらを実現しようと目論む、自身の綱領宣言的局面がない。マリヤ・ミトロヴィチ (Marija Mitrović, 1941-) は、考えられる外的な理由の一つとして、「スロヴェニアのモダニストたちが自前の出版機関を持たなかったこと」⁽⁶⁷⁾、また、「彼らの規範的批評に対する蔑視」⁽⁶⁸⁾を、理由として挙げている。ツァンカルは文芸批評家たちとの戦いを見ても、彼が周到に排除しなければならなかったものが、自然主義や、デカダンス、形式主義にとどまらないことがわかる。これについてもミトロヴィチが、興味深い分析をしている。

「鼻の上の眼鏡よろしく手に創作論を振りかざし」、何がうってつけのモデルに相応しくて、何が相応しくないのか、入念に品定めをする批評家たちについて、ツァンカルは何度も議論を展開している。綱領を書き記すことは、そのような批評家たちに凶悪な武器を手渡すことを意味していたかもしれない(69)。

ツァンカルがイヴァン・カツィヤナルの筆名で、最初の詩を発表した『リュブリャンスキ・ズヴォーン』は、1881から1941年まで、リュブリャーナで発行され、長いあいだ、スロヴェニアの中心的文芸誌の役割を果たした。この民族派、リベラル系の月刊誌は、スロヴェニアの文学、文化、地域研究にとどまらず、他のスラヴ人たちの文化や文学に関する情報も、スロヴェニア語でもたらした(70)。

ただし、ここで発表された文学作品には、1890年代以降短期または長期で、ウィーンに暮らした作家たちが書いたものが多かったにもかかわらず、ドイツ語によるウィーンが欠落している。アンドレイ・レーベン (Andrej Leben, 1966-) は、「当時のスロヴェニア側の文脈の中で、芸術や文学が民族形成、また民族肯定機能の観点から考察され、結果、ウィーンのモデルネ、形成されつつあったスロヴェニア・モデルネを含めて、新しい文学的潮流が『リュブリャンスキ・ズヴォーン』では、そっくり拒否、または周縁へと追いやられてしまった」(71)、と指摘している。新しいヨーロッパ文学に対する拒否的態度は、当時もう一つの重要なスロヴェニアの文芸誌だった、カトリック系の月刊誌『ドーム・イン・スヴェート』 („Dom in svet“, 1888-1944) も同様だった(72)。

スロヴェニア・モデルネの作家たち、ツァンカル、ジュパンチッチ、ケッテ、ムルンの作品は、それゆえ『リュブリャンスキ・ズヴォーン』には、彼らの「挑戦的ではない」(konventioneller) (73)作品が選択、掲載されている。レーベンによれば、ツァンカルのほかにも、ジュパンチッチは、『リュブリャンスキ・ズヴォーン』が彼の詩の多くを持っているにもかかわらず、一つも発表してくれないと嘆いた。ケッテは、1895年から1899年まで編集者を務めたヴィクトル・ベジェク (Viktor Bežek, 1860-1919) について、ベジェクが独裁者で、「何が雑誌に載せられるべきで、何が載せられるべきでないのか、何が道徳に合致していて、スロヴェニア人が読んでよいもの、デカダンスの臭いのしないもの、倫理的、道徳的に誰も墮落させないものを決めている」、と批判していた(74)。

1866年、ハプスブルク帝国はプロイセンとの戦争に敗れ、統一ドイツから排除された。翌1867年、ハプスブルク帝国はハンガリー王国に大幅な自治を認め、新たに「東欧帝国」(75)としての道を歩み始める。オーストリアでは、これまで長く少数のドイツ人によって、多数の異民族が専制的に支配されてきた。そのオーストリアの支配層がハンガリーのマジャール人貴族と手を結び、スラヴ系その他の諸民族は、「二重帝国の決定的な反対者の地位」(76)に追いやられた。矢田俊隆

はかつて、第1次世界大戦にいたる時期のオーストリアを、「ドイツ・スラヴ両民族の激突時代であり、あらたに起こった民主主義運動や社会運動も、この問題と深い関係をもっていた」⁽⁷⁷⁾、と説明している。

ドイツ語空間にせよ、スロヴェニア語空間にせよ、いずれにせよ異郷の地ウィーンでスロヴェニア語で執筆するツァンカルにとって、必ずしも居心地はよかつたとは思われない。ツァンカルは、それでもスロヴェニア語で書きつづけた。イブセン (Henrik Ibsen, 1828-1906)、ストリンダベリ (Johan August Strindberg, 1849-1912)、ドストエフスキー (Fyodor Mikhaylovich Dostoevskiy, 1821-1881)、世紀末文学、ユーゲント・シュティール、ツァンカルは時代のあらゆる様式を吸収、消化しつつ⁽⁷⁸⁾、それらのいずれにも回収されることのないよう周到に用心し、言葉 (beseda)、文法 (slovnica)、内容 (vsebina)、母音 (samoglasnik)、子音 (soglasnik)、リズム (ritem)、スロヴェニア語による新たな言語表現の可能性を模索していたと思われる⁽⁷⁹⁾。ツァンカルの明瞭な言語表現が、ヒエラルヒー的文構造を避ける点に注目した、次のクラリチーニのツァンカル評が秀逸である。

Demokrat ist Cankar bis in die Syntax hinein.⁽⁸⁰⁾

ツァンカルは、統語論にいたるまで民主主義者だ。

本稿は、「オーストリア＝ハンガリー帝国期ドイツ語圏文化の複眼的考察」を目的とした、平成31年度（令和元年度）國學院大學国内派遣研究員としての、研究の成果の一部です。

注

- (1) 拙論「スロヴェニア文学事始——イヴァン・ツァンカルを手掛かりに」（國學院大學『國學院雑誌』第119巻第4号、2018年、1～11頁）、とりわけ1～3頁参照。
- (2) France Bernik: *Ivan Cankar: ein slowenischer Schriftsteller des europäischen Symbolismus; 1876-1918*. Aus dem Slowenischen von Klaus Detlef Olof. München (Slavica Verlag) 1997. S. 12.
- (3) Ebd. S. 12.
- (4) 佐々木とも子、イヴァン・ゴドレールは「解説——イヴァン・ツァンカルと『慈悲の聖母病棟』」中、ツァンカルの父ヨージェ (Jože Cankar, 1842-1914) について、「八番目の子イヴァンの誕生後まもなく出稼ぎのために家を離れた」としている（佐々木とも子、イヴァン・ゴドレール「解説——イヴァン・ツァンカルと『慈悲の聖母病棟』」（イヴァン・ツァンカル『慈悲の聖母病棟』（佐々木とも子、イヴァン・ゴドレール訳、成文社、2011年）185～205頁所収）186頁）。ジョルジュ・カステランとアントニア・ベルナルルによれば、息子のイヴァンが「生まれてまもなく父親が亡くなり」（ジョルジュ・カステラン、アントニア・

ベルナール『スロヴェニア』（千田善訳、白水社、2000年）128頁）、とされ、拙論「スロヴェニア文学事始」の、「仕立職人だった父が早くに亡くなり」（拙論「スロヴェニア文学事始——イヴァン・ツァンカルを手掛かりに」2頁）の記述は、後者に依拠した。ただしツァンカルの父ヨジェの没年は実際には1914年であり、2018年、ツァンカル没後100年の年にリュブリャナで出版された記念論集によれば、職を求めて長期間家族のもとを離れるようになるのも、ツァンカルがすでにリュブリャナの実科学校に通っている、1890年以降と思われる（Vgl. Aljoša Harlamov: Ivan Cankar, človek in mit. In: Ders. (Hg.): *Ivan Cankar: Literarni revolucionar*. Ljubljana (Cankarjeva založba) 2018. S. 7-51, S. 9 f.）。父ヨジェの亡骸は、母ネジャの眠るヴルフニカのツァンカル家の墓地に埋葬され、墓碑銘の没年も1914年と刻まれている。

母ネジャは1897年9月23日に亡くなり、ツァンカルは彼の最初の詩集『エローティカ』（„Erotika“, 1899）の報酬を前払いで受け取り、葬儀費用を賄った（Vgl. Erwin Köstler: Ivan Cankar: Daten zu Leben und Werk. In: Ivan Cankar: *Materialien & Texte*. Zusammengestellt und aus dem Slowenischen übersetzt von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2000. S. 142-145. S. 142）。

- (5) Vgl. Maria Vera Claricini: Cankars Wien – ein Ausschnitt der Stadt. Das Bild Wiens in der slowenischen Literatur. In: Gertraud Marinelli-König, Nina Pavlova (Hg.): *Wien als Magnet? Schriftsteller aus Ost-, Ostmittel- und Südosteuropa über die Stadt*. Wien (Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften) 1996. S. 393-435. S. 406.
- (6) Vgl. Moritz Csáky: *Das Gedächtnis der Städte. Kulturelle Verflechtungen – Wien und die urbanen Milieus in Zentraleuropa*. Wien/Köln/Weimar (Böhlau Verlag) 2010. S. 196.
- (7) Vgl. Maria Vera Claricini, S. 405.
- (8) Ebd. S. 405.
- (9) Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band I*. Wien (Verlag Kremayr & Scheriau) 1992. S. 532.
- (10) Vgl. Ebd. S. 539.
- (11) Vgl. Erwin Köstler: Nachwort. In: Ivan Cankar: *Weißer Chrysantheme. Kritische und politische Schriften*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2008. S. 425-448. S. 432.
 当時ヤコブ・ブルクが『ズューデン』の編集を担当していた（Vgl. Ebd. S. 432）。
- (12) Ebd. S. 432.
- (13) Maria Vera Claricini, S. 406.
- (14) Vgl. Erwin Köstler: Überblick über die Cankar-Übersetzungen in deutscher Sprache 1900-1999. In: Ivan Cankar: *Materialien & Texte*. S. 132-141. S. 132.
- (15) Ebd. S. 132.
- (16) Ebd. S. 132.
- (17) Ebd. S. 133.
- (18) Daniela Trieb: Interview mit Erwin Köstler. Auf: <http://transstar-europa.com/erwin-kostler/>, im Juni 2014. (2020年3月20日最終閲覧)
- (19) Vgl. Ebd.
- (20) Ebd.
- (21) ツァンカル作品計15巻の書誌情報全体については、拙論「スロヴェニア文学事始——イヴァン・ツァンカルを手掛かりに」9～10頁、註（9）参照。

- (22) Ivan Cankar: *Vor dem Ziel. Literarische Skizzen aus Wien*. Aus dem Slowenischen und mit einem Vorwort von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1994.
- (23) Ebd.
- (24) Ivan Cankar: *Am Steilweg*. Herausgegeben und aus dem Slowenischen übersetzt von Manfred Jähnichen. Berlin/Weimar (Aufbau-Verlag) 1965.
- (25) Vgl. Erwin Köstler: *Vom kulturlosen Volk zur europäischen Avantgarde. Hauptlinien der Übersetzung, Darstellung und Rezeption slowenischer Literatur im deutschsprachigen Raum*. Bern (Peter Lang) 2006. S. 288.
- (26) Ebd. S. 288.
- (27) Fritz von Haniel: Vorwort. In: Ivan Cankar: *Das Haus zur barmherzigen Mutter des Gottes*. Autorisierte Übersetzung aus dem Slowenischen von G(usti). Jirku. Wien/Leipzig (Niethammer-Verlag) 1930. S. 7-9. S. 7.
- (28) Josef Friedrich Perkonig: Ivan Cankar und sein Volk. In: Ivan Cankar: *Aus dem Florianital*. Die Übertragung besorgten Thomas Arko und Josef Friedrich Perkonig. Klagenfurt (Eduard Kaiser Verlag) 1947. S. 5-16. S. 5.
- (29) Vgl. France Bernik: Opombe. In: Ivan Cankar: *Zbrano delo. 2. Erotika 1902 / Neobjavljene pesmi / Nemske pesmi / Dodatek (Pesmi 1895-1914)*. Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravil in opombe napisal France Bernik. Ljubljana (Državna založba Slovenije) 1968. S. 267-412. S. 363.
- (30) Ivan Cankar: *Zbrano delo. 2.* S. 139.
- (31) Ebd. S. 143.
- (32) 村山雅人『反ユダヤ主義——世紀末ウィーンの政治と文化』（講談社、1995年）、とりわけ66頁以下、拙著『カネッティを読む——ファシズム・大衆の20世紀を生きた文学者の軌跡』（現代書館、2013年）、とりわけ51頁以下、拙論「ヒトラーのウィーン時代試論」（國學院大學外国語文化学科『Walpurgis 2019』、2019年、55～66頁）参照。
- (33) 田口晃『ウィーン 都市の近代』（岩波書店、2008年）109頁以下参照。
- (34) ピーター・L・バーガー『癒しとしての笑い——ピーター・バーガーのユーモア論』（森下信也 訳、新曜社、1999年）115頁。Peter L. Berger: *Redeeming laughter: the comic dimension of human experience*. Berlin/New York (Walter de Gruyter) 1997. S. 60f.
- (35) ピーター・L・バーガー、353頁。Peter L. Berger, S. 205.
- (36) ピーター・L・バーガー、357頁。Peter L. Berger, S. 207.
- (37) Moritz Csáky, S. 200.
- (38) Ebd. S. 200.
- (39) 拙論「スロヴェニア文学事始——イヴァン・ツァンカルを手掛かりに」、とりわけ4頁以下参照。
- (40) アレシユ・ガブリチ（アンドレイ・ベケシュ訳）「第41章 学校教育——母語による教育が成し遂げた飛躍」（柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編著『スロヴェニアを知るための60章』（明石書店、2017年）236～241頁所収）236頁参照。
- (41) ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、27頁以下。
- (42) アレシユ・ガブリチ、236頁以下。
- (43) 岩崎周一『ハプスブルク帝国』（講談社、2017年）227頁。
- (44) 同掲書、227頁。
- (45) アレシユ・ガブリチ、237頁。
- (46) 大津留厚『【増補改訂】ハプスブルクの実験——多文化共存を目指して』（春風社、2007年）

- 101頁参照。
- (47) 同掲書、121頁参照。
- (48) ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、15頁参照。
- (49) Maria Vera Claricini, S. 402.
- (50) Ebd. S. 402.
- (51) Ebd. S. 404.
- (52) Ebd. S. 405.
- (53) Vgl. Erwin Köstler: Anmerkungen. In: Ivan Cankar: *Weißer Chrysantheme*. S. 449-501. S. 491. Anm. zu S. 288.
- (54) Ivan Cankar: Realka. In: Ders. *Zbrano delo. 25. Politični članki in satire / Govori in predavanja*. Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravila in opombe napisala Dušan Voglar in Dušan Moravec. Ljubljana (Državna založba Slovenije) 1976. S. 130-136. S. 130f. Ders.: Die Realschule. In: Ders.: *Weißer Chrysantheme*. S. 313-321. S. 314.
- (55) Ivan Cankar: Realka. S. 131. Ders.: Die Realschule. S. 315.
- (56) Ivan Cankar: Realka. S. 132. Ders.: Die Realschule. S. 316f.
- (57) Ivan Cankar: Realka. S. 133. Ders.: Die Realschule. S. 317.
- (58) Ivan Cankar: Realka. S. 133. Ders.: Die Realschule. S. 317.
- (59) Ivan Cankar: *Zbrano delo. 22. Moje Življenje / Grešnik Lenart / Črtice (1914)*. Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravil in opombe napisal Janko Kos. Ljubljana (Državna založba Slovenije) 1975. S. 288. Ders.: *Materialien & Texte*. S. 13.
- (60) Vgl. Erwin Köstler: Anmerkungen. In: Ivan Cankar: *Weißer Chrysantheme*. S. 450. Anm. zu S. 18.
- (61) Vgl. Ivan Cankar: *Zbrano delo. 22*. S. 288. Ders.: *Materialien & Texte*. S. 13.
ツァンカルにスロヴェニア語を教えたフラン・レヴェツは、1881年から1890年まで、『リュブリヤンスキ・ズヴォーン』の編集者だった (Vgl. Andrej Leben: „Ljubljanski zvon“. In: Stefan Simonek (Hg.): *Die Wiener Moderne in slawischen Periodika der Jahrhundertwende*. Bern (Peter Lang) 2006. S. 181-192. S. 181. Anm. 2)。
- (62) Vgl. Andrej Leben, S. 186. Anm. 14.
- (63) Vgl. Erwin Köstler: Ivan Cankar: Daten zu Leben und Werk. S. 143.
1897年初め、スロヴェニア文学クラブのメンバー、フラン・ゴヴェカルが、『スロヴェンスキ・ナーロト』文芸欄担当責任者に就任している (Vgl. Erwin Köstler: Nachwort. In: Ivan Cankar: *Weißer Chrysantheme*. S. 429)。
- (64) Ivan Cankar: *Zbrano delo. 22*. S. 288. Ders.: *Materialien & Texte*. S. 13f.
- (65) Erwin Köstler: Nachwort. In: Ivan Cankar: *Die Fremden. Roman*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2004. S. 215-237. S. 227.
- (66) Ebd. S. 227.
- (67) Marija Mitrović: *Geschichte der slowenischen Literatur. Von den Anfängen bis zur Gegenwart*. Aus dem Serbokroatischen übersetzt, redaktionell bearbeitet und mit ausgewählten Lemmata und Anmerkungen ergänzt von Katja Sturm-Schnabl. Klagenfurt/Celovec-Ljubljana/Laibach-Wien/Dunaj (Verlag Hermagoras/Mohorjeva) 2001. S. 311.
- (68) Ebd. S. 311.
- (69) Ebd. S. 311.

- (70) Vgl. Andrej Leben, S. 181.
- (71) Ebd. S. 182.
- (72) Vgl. Ebd. S. 182. Anm. 4.
1914年からは、ツァンカルの従弟イジドール・ツァンカルが『ドーム・イン・スヴェート』の編集長を務めた（ジョルジュ・カステラン、アントニア・ベルナル、134頁参照）。
- (73) Andrej Leben, S. 185.
- (74) Vgl. Ebd. S. 185.
- (75) 大津留厚「3章 ハプスブルク帝国の民族問題」（木戸蓊、伊東孝之編『東欧現代史』（有斐閣、1987年）45～70頁所収）48頁。
- (76) 矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究』（岩波書店、1977年）292頁。
- (77) 同掲書、292頁。
- (78) Vgl. Maria Vera Claricini, S. 403.
- (79) Vgl. Ivan Cankar: *Zbrano delo. 30. Pisma V / Dodatki / Dopolnila in popravki / Pregledi.* Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravil, napisal opombe k pismom in sestavil kazala Jože Munda. Ljubljana (Državna založba Slovenije) 1976. S. 64f.
- (80) Maria Vera Claricini, S. 407.